

プロローグ

クオレ・デュナミスにとって父親という存在は疫病神に等しいものであった。

クオレの父、フランシスコ・デュナミスの職業は「自称」冒険家である。ただその実態を、幼少時のクオレはたんなるごく潰しとみなしていた。

クオレの父親は冒険と称してはたびたび家を空け、働きもせずにガリアや他国を渡り歩き、たまに帰ってきたかと思えば、妻から金をせびってまた出かけていくという生活を繰り返す男であった。

クオレの母親は生活を支えるために必死になって働いたが、もともと病弱な身体であったため満足に仕事をする事ができず、クオレの家はつねに貧乏であった。

クオレの幼少時は悲惨の一言に尽きる。満足に食えることができず、ボロ切れのような衣服しかまとうことができず、金が無いため学校にも通えなかった。彼が生涯にわたって文字の読み書きができなかったのはこのためである。

母との暮らしを支えるため、クオレは五歳のころから大人に交じって鉱山での重労働を強いられた。毎日、周囲の大人からいじめを受けながら、クオレはそれでも懸命に働いた。息子に向かって「申し訳ない」と泣く母親を逆に慰めながら、クオレは父への憎悪を強めていった。いつか必ず殺してやる。そう心のなかで誓いながら、クオレは一〇歳の誕生日を迎えた。

その夜であった。父親が二年ぶりに我が家へ帰ってきたのは。

フランシスコは家に帰るなり、さも当然のようにテーブルに用意されていた夕食（それはクオレの誕生日のため、母が用意したささやかな食事だったのだが）を平らげると、やや興奮した様子でふたりに話をしはじめた。

「聞いてくれ、おれはついに黄金境の手がかりを見つけたんだ！」

父の話によると、旅先の徳の高い僧侶から、異大陸に関する話をきいたのだという。大洋を渡った遙か先に、まだ見ぬ未開の地がある。そこはうつそうと生い茂る木々に覆われた場所であり、そのどこかに、黄金で彩られた美しい都があるのだそうだ。

くだらない話だ。クオレはそう思った。出来損ないの作り話であり、詐欺師に悪用される類の話に近い。

だが父親は、息子とはまるでちがう想いを抱いていたようである。

「おれは黄金境をみつけないんだ！」

目を輝かせながら訴える父に対し、母は大きなため息をつきながら「どうぞご勝手に」と言った。

この時、もしもクオレに予知能力があったなら、必死になって父を止めたであろう。父が止まるかどうかはさだかではなかったが、それでも実行したはずだ。その後を訪れる不幸を知っていたならば。

父はさっそく行動を開始した。町のいたるところで演説をおこない、黄金境にいつて黄金を持ちかえってくると風潮してまわったのだ。大半の人がフランシスコの話を手話だと一蹴したが、なかには物好きな人もいて、フランシスコの話信じて金をだした。その金を元に、クオレの父は友人のハイマンを伴って海の果てへと出かけていったのである。

もう帰ってくるな。内心で吐き捨てながら父を見送ったクオレであるが、その願いは成就された。フランシスコは本当に帰ってこなかったからだ。

一年後、帰ってきたのは友人のハイマンだけであった。

ハイマンはクオレと母に告げた。フランシスコは確かに異大陸に辿りつき、黄金境を見つけたのだが、原住民とトラブルを起こし、捕まって殺されてしまったと。

そう言ってハイマンは、唯一持ちかえることができた黄金のメダルをクオレに渡すと、いずこかへ去っていった。

父の死を聞いても、クオレはまるで悲しくならなかった。むしろ自業自得だと思い、せいせいの気分であった。殺す手間がはぶけたとさえ思ったほどだ。

ところがである。物事はそこで終わりではなかったのだ。

フランシスコの死を聞いて金を出した人たちがクオレの家を押しかけてきたのである。彼らはクオレと母親に詰めよると、口々に「金を返せ」と喚きたてた。家中が荒らされて、金目の物は根こそぎ奪われてしまった。「それだけは堪忍して！」と母がすがったのは、母の両親の形見の指輪だったのだが、それも容赦なく盗られてしまった。家も売られて、わずかな田畑も売られて、物という物すべてを売られて、クオレと母親は無一文で放りだされてしまった。

すべてを奪われたショックで母は病に倒れ、そのままあっけなく死んでしまった。

天涯孤独となったクオレは母の埋葬を終えると、口のなかに含んで奪われるのを防いだ黄金のメダルを手の平でもてあそびながら、無表情のまま呟いた。

「黄金境か……いいだろう、ぼくが見つけてやる。そして手に入れてやる。運命をこの

手で切り開いてやる。それが親父への復讐だ！」

クオレは笑った。涙を流しながら、過去を振り返って。

……クオレはその後、各地を転々としながら軍隊へ入隊することとなる。軍隊で飯にありつき、武闘を磨いて戦場で活躍すると、その才能が認められてどんどんと出世していった。そして一八歳のとき、史上最年少の若さでガリア帝国の精鋭、ガリア騎士団の長を務めるにいたったのである。

それから二年、クオレ二〇歳の春、彼の運命を変えるデボーラの戦いがおこった。

デボーラの戦いは、その後の歴史に大きな転換点をもたらしたとされるいくさである。

デボーラの戦いは、新生ガリア帝国とガルシア大帝国との国境にあるデボーラという川が、冬の雪崩によって川の流れを変えてしまい、国境線が大きく変わってしまったことに端を発する。デボーラ川には国境線としての基準のほかに、周辺域の水源としての役割がある。この川がないと飲み水や農業用水が確保できないのだ。

川の流れが自国へ傾いたことをいいことに、元の国境線を主張するガルシア側と川の流れに沿った国境線を主張するガリア側の話し合いは平行線をたどり、両国はついに軍隊を出動させて対決するにいたったわけである。

ガルシア大帝国は大陸の四分の一を支配する超大国だ。五〇〇万人を超す軍隊を保有しており、ここ一〇〇年ほどはいくさで負けたことがない。対するガリア帝国は、大国であるものの、国土も保有する軍隊の数もガルシアには遠く及ばない。だから万人の見るところ、ガリア側が勝てる確率はかぎりなくゼロだと思われていた。

ガルシア軍一〇万を率いるのは戦歴の猛将レッケンベル。大人が三人がかりでやっと持てるような大剣を片手で振りまわす大男で、これまでに二〇回以上、戦場に赴いており、四桁に迫る数の敵兵を葬ってきたとされる人物だ。ガルシア大帝国でも屈指の強さを誇る武人である。

迎え撃つガリア軍の総兵力は六万で、指揮官は皇帝の右腕であるジノ・ハイドが務める。

率いる軍の大半が歩兵であり、それを知ったレッケンベルは大笑いをして勝利を確信したと伝えられている。

四月の下旬、この時期にしては珍しく雪が降った日の朝、両軍はカプト平原にて激突した。血が爆ぜ、雪の大地を赤く染める。絶叫が大気を震わせ、死者が地に伏せるなか、デボーラの戦いは正午に決着をみた。

勝者はガリア軍であった。ガルシア軍は七万人を超える死傷者を出し、さらには猛将レッケンベルまでも討ち取られて大敗を喫したのである。

この結果に大陸全土が驚いた。なぜガリア軍は、数の多いガルシア軍に勝てたのであるうか。

勝因は、この戦いではじめて投入された武器にあった。武器の名は「銃」という。

銃とは鉄製の長い筒のようなものであり、火薬を使って鉛の弾を発射する武器のことだ。

その威力は強力で、弾は弓矢よりも遠くへ届き、命中すれば一発で人を死にいたらしめることができる。正式名称はフリントロック（火打石）式銃といって、ガリア軍はこの銃を数万丁用意してデボーラの戦いに臨んだのだった。

デボーラの戦いはガリア軍の攻勢一方ではほぼ終始した。戦いが始まるやガリア軍の戦列から火が吹かれ、ガルシア兵がばたばたと倒れていった。ガルシア軍はわけがわからないまま反撃に移ったが、放った矢はガリア軍まで届かず、一時間に満たぬうちに多くの兵を失ってしまった。それでも、猛将レッケンベル率いるガルシア軍の底力は強大で、死を覚悟した騎兵隊が犠牲を承知で突っ込んできた。騎兵隊の半分は銃の餌食になってしまったが、残り半分はガリア軍まで到達してその武威をいかんなく発揮したのである。

刀槍を振るい、馬蹄で蹴散らして、ガルシア軍はガリア軍を圧倒した。しかしほどなくしてガリア騎士団が応戦に入り、両軍の血生臭い戦いはじまった。血が爆ぜ、雪の大地を赤く染める。絶叫が大気を震わせ、死者が地に伏せるなか、猛将レツケンベルと騎士団長クオレ・デュナミスが激突した。両者の激しい斬撃の応酬はクオレの一閃で幕を閉じ、それがそのままデボーラの戦いの幕引きとなった。

この戦いで功績により、クオレ・デュナミスは宮廷に招かれることとなる。

ガリア帝国の首都、グロイツェン。その中心地に巨大で豪壮な宮殿がそびえ建っている。ガリア皇帝、グレン・ハロルドが住まう城だ。普段をグロイツェン郊外にある砦で過ごしているクオレにとっては騎士団長就任式以来に訪れる場所であった。

成長したクオレはたくましい青年になっていた。平均よりも高い背丈、鍛え抜かれた身体、凛々しく整った顔立ち、そしてその眼光は獲物を定めた猛禽類のように鋭かった。もしも彼の母親がまだ存命であったなら、立派に成長してくれたと言つてうれし泣きをしたであろう。彼はある決意をたずさえて、今日という日を迎えたのであった。

宮殿内にある謁見の間に通されたクオレは、中央に敷かれた赤い絨毯を踏みしめて、皇帝の前にうやうやしく参上した。そして片膝をつき、最高の礼をほどこす。

「クオレ・デュナミス、陛下の命を受けて参上いたしました」

「よく来てくれたな、デュナミス卿。堅くなる必要はない、今日はそなたを称えるために呼んだのだ、楽にしてくれ」

鷹揚な声を皇帝はクオレにかけた。ガリア皇帝グレン・ハロルドは若い皇帝だ。在位期

間はすでに五年になるが、年齢はまだ三〇に達したばかりである。眉目秀麗な貴公子風の男であるが、繊弱な要素はまるでなく、全身には力がみなぎっており、両眼には野心が色濃く輝いていた。彼はガリア史上、もっとも有能な皇帝である。

グレン皇帝は、決して大きくはないが、存在感のある声でクオレに語りかけた。

「デュナミス卿、デボーラの戦いにおけるレッケンベルとの一騎打ち見事であった。その功績を称え、そなたに爵位の授与と領地の進呈が決定した。今後もガリアのために働き、力を尽くすがよい。さすればさらなる恩賞をもってその功績に報いよう。皆の者、デュナミス卿に拍手を」

皇帝にうながされて、謁見の間に控える高官や兵士たちがクオレに拍手を送った。

それが止むのを待ってから、クオレは決意を両眼に湛え、皇帝に向かって自らの想いを口にした。

「ありがとうございます、陛下。ですが、自分は爵位も領地もいりませぬ。その代わりに、ひとつだけお願いがございます。その願いを、ぜひとも褒賞として叶えていただきたいでございます」

クオレの発言を受け、高官のひとりが糾弾の声をあげた。いわく、皇帝陛下の謝意を無下にすると何事か！ と。だが皇帝は、高官の発言を片手で制止して、かわりに不敵な笑みを浮かべてみせた。

「興味が沸くな。爵位や領地ではなく、他になにを望む？ 話してみよ」

「はい。自分に異大陸と黄金境の探索許可を与えていただきたいのです」

クオレの突拍子もない発言に、皇帝はわずかに眉を吊り上げてみせた。高官の幾人かが

くすくすと笑っていたが、皇帝自身は決して笑うことなく真顔のままであった。

「全容がわからぬな。はじめから詳しく話してみよ、許可を出すかどうかはそれからだ」

「承知しました」

クオレは言われたとおり、はじめからすべてを話した。自分の生い立ちや父のことを、

熱意と憎悪をもって皇帝に伝えた。黄金境を見つけだし、その富を手中に収めて、過去と

決別して未来を切り開きたい、と。

皇帝は静かに話を聞いていたが、やがて姿勢を正してクオレに問いかけた。

「デュナミス卿、お主は本当に黄金境があると信じているのかな」

「はい」

「その根拠は？」

「これです」

クオレは黄金のメダルを懐から取り出した。奇怪な紋様が刻まれたソレは、父の友人の

ハイマンが渡してくれた黄金境の品である。黄金のメダルを皇帝に渡してから、クオレは

自分が数年かけて調べあげた異大陸と黄金境に関する知識を披露した。

異大陸や黄金境に関する噂話は、ガリアでは数百年前から与太話として細く囁かされてい

たものである。

クオレの調べによると、それらの話は二〇〇年前、その当時、海で猛威を振るっていた

ヴァイキングたちによってもたらされたものだとわかった。海を縦横無尽に駆け巡るヴァ

イキングたちは大洋を渡って異大陸にまでその活動範囲を広げていたのだ。ヴァイキング

はやがてガリア帝国によって駆逐されたが、一部は逃げのびて各地に散り、地域に溶け込

んで生き残った。異大陸と黄金境に関する話は、そこからはじまったのである。その証拠に、ヴァイキングの子孫が住まう村のひとつから、メダルに刻まれた紋様と同じ紋様が刻まれた黄金の指輪を発見することができた。それがこの指輪だと、クオレは皇帝に差し出した。

クオレの説明を聞いて、また、メダルと指輪を交互に見比べながら、皇帝は大きくうなずいてみせた。

「デュナミス卿はよく調べた。その仮説、余は正しいと思うぞ」

そう言って皇帝は自らもっていた知識を披露した。宮殿の地下深くには様々な財宝が眠る宝物庫があるのだが、そのなかに、このメダルや指輪に刻まれた紋様と同じ紋様が刻まれた黄金の品が複数あるというのだ。言い伝えによると、それらは、数代前の皇帝がヴァイキングを討伐した際に没収した宝だといわれているそうだ。

「異大陸に黄金境か……おもしろい」

皇帝は不敵に笑ってみせた。この瞬間、クオレの願いは叶ったのである。

「デュナミス卿に異大陸探索の許可を与える。必要な資材、物資、人員、装備など、整えるべきものはすべて用意しよう。万全の体勢で臨むがよい。デュナミス卿に幸あれ」

「ありがとうございます、陛下」

クオレはうやうやしく頭を下げた。

こうして、クオレの冒険が幕を開けたのであった。

目的を果たし、謁見の間を後にしたクオレは控室へと戻った。そこで彼を出迎えたのは、

クオレと同年代の青年であった。

「どうだクオレ、うまくいったのか？」

言葉をかけてきた青年の名前はアラン・カストロという。年齢はクオレと同じだが、顔つきがやや幼く見えるため、クオレよりも年少に思われることが多い。クオレの副官を務めており、文字の読み書きができないクオレに代わって書類を作成したり、文章を朗読して内容を伝えたりしてクオレの仕事を補佐している男だ。

アランはもともと中級貴族の出身であったのだが、彼が一〇歳の時に父親が金鉱投資に失敗して破産してしまい、一時、家なき子となっていた。クオレとはその時期に出会い、つるみはじめ、いまに至る。クオレが異大陸や黄金境に関する伝承を調べるとき、彼だけが唯一、協力して手伝ってくれた。クオレの無二の親友である。

「ああ、陛下の許可がおりた。さっそく準備をはじめよう、行動するなら早いほうがいい。アラン、おまえは先に戻って砦のみんなにこのことを伝えてくれ。探索の参加者を団員たちから募る」

「了解。ん？ クオレ、おまえはまだ戻らないのか？」

「ああ、これから人に会いに行くんでね」

その人物の名前を聞いて、アランは納得した。その人物が今探索に必要な不可欠な人物であったからだ。

グロイツェンの大通りには商店や雑貨屋、食事処や古書店など、何百もの店が軒を連ねており、大勢の人が行きかって賑わいをみせている。しかし一步道を外れると、ひっそり

とした裏道が続いており、その先に、古びた一軒の酒場が建っていた。

半ば朽ちていて、地震が起きれば一発で倒壊しそうなその酒場は、「夏のそよ風」亭というさわやかな名前を持っている。しかし、その名前とは裏腹に、店のなかにはどんよりとした空気が漂っていた。

ここは下級労働者たちが集う店で、安くて不味い酒を大量に提供してくれる場所だ。一日働けば三日は飲んでいられるため、昼間だというのにすでに酔い潰れた人が幾人もいる。クオレがこんな場所を訪れたのには、むろん、わけがある。クオレが会いたい人物がこの店に頻繁に出入りしているとの情報が入ったからだ。しかもここ数日は、ほぼ毎日のように通い詰めているそうだ。

その情報通り、確かにその人物はいた。店の奥のテーブルすでに酔い潰れており、伏して爆睡している最中であつた。

「マスター、水を一杯いただけけるかな」

樽のジョッキになみなみと注がれた水を、クオレは酔いつぶれて眠っている男に容赦なく浴びせかけた。

「つ、冷たい！ 何をする！」

驚き、怒り、怒鳴りながら飛び起きたその男は、クオレをみるなり絶句した。

「ク、クオレ……」

「久しぶりだな、ハイマン。元気だったか」

恐ろしいほど優しい笑みを浮かべて、クオレは父親のかつての親友に着席をうながした。

クオレは異大陸と黄金境に関する情報を収集すると同時に、行方不明となっていたハイ

マンの捜索もおこなっていた。複数の密偵を金で雇い、成功報酬を約束してガリア各地を探させた。捜索は難航したが、それでも一年ほどでその行方が判明した。かつては帝国大学で教鞭をとっていた身が落ちぶれて、いまはグロイツェンで日雇いの仕事をしながら細々と暮らしていることがわかったのだ。そのことを知ったクオレが彼のもとを訪ねたのは、むしろ、哀れみのためではない。

ハイマンのコップにこの酒場で一番高い酒を注ぎながら、クオレは自らが調べたハイマンのその後に関してを嫌味のように語りはじめた。

「あのこととは聞いたよ、ハイマン。大学には戻れず、追放されたそうだな。黄金境を見つけた、というホラを吹いた嘘つきとして。かつて「二〇〇〇年に一人の天才」と称された身が哀れなものだ」

クオレは故意にハイマンを侮辱した。激発を期待してのことであったが、クオレの思惑に反して、ハイマンは冷静なままであった。

「……恨み言ならいくらでも聞こう、君には私を憎み責める権利があるのだから。フランシスコを救えなくてすまなかった、本当に申し訳ない」

ハイマンは頭を深々と下げ、謝罪の言葉を口にした。

だが、その言葉はクオレにとっては耐え難い侮辱であった。だからクオレは憎悪を込めて次の言葉を放った。

「なにか勘違いしているようだな、ハイマン。おれは父親の死に関してあなたに謝罪など求めていない。むしろ、アレは死んで当然の男だ。生きていれば確実におれが殺していただろう。だから父に関する贖罪の気持ちは即刻ドブ川に捨てるべきだ。それは生きている

なかでもっとも不必要な感情だからな」

クオレの怒りを受け、ハイマンはうなだれて「すまない」と謝った。ハイマンはクオレの悲惨な過去を知らないわけではない。

「まあ、与太話はそこまでにしよう。本題だ。ハイマン、おれはこれから異大陸へと向かう。目的はもちろん、黄金境を探しだして黄金を手に入れるため——そこでだ、この探索にあなたにもくわわっていたきたいのだが、いかがかな？」

クオレの単刀直入な申し出に対し、ハイマンはコップの酒を飲みほしてから、小さく息を吐きだした。

「……なぜ私に同行を求める？　こんな乞食を連れて行ったところで、足手まといにしかならないというのに」

「ハイマン、おれが何も知らないと思っているのか？　あなたが帝国大学開闢以来の天才であること、また、言語学、数学、医学、天文学、生物学、考古学など、あらゆる分野に精通した人物であること、すでに調べがついているのだよ。だからこそ、一〇年前、親父は異大陸に辿りつき、黄金境を見つけだすことができた。すべてはあなたの力によるものだ。だからこそ、同行を求めているんだ、ハイマン。あなたの知恵と経験をおれに貸してくれ、頼む」

強い意志と決意を秘めた瞳でクオレはハイマンに訴えかけた。だが、ハイマンの返答は否であった。

「非力な私をそこまで買ってくれるのはうれしいよ。だが、私の身体はもうボロボロなんだ。昔のような体力はないし、気力もつとない。不屈だった精神力など、とうの昔に消

え去ってしまったている。それに、酒の飲みすぎと不摂生な生活が祟って胃に腫瘍ができてしまったんだ。こんな身体では、とてもではないが長い旅路は耐えられないだろう。すまないが、勘弁してくれないか……」

「どうしてもダメか？」

「すまない……」

「そうか」

ハイマンに同行を拒絶されて、クオレは席から立ちあがった。拒む者をむりやり連れて行くつもりはクオレにはない。黄金境探索を多少有利に進めようとは思っていたが、助力が得られぬのであればそれはそれで構わないことだ。他力本願で事を成し遂げようとするつもりはさらさらなかった。

「ではな、ハイマン。身体は大事にしろよ」

立ち去ろうとするクオレを、ハイマンは申し訳なさそうに見送ったが、ふとあることを思いだし、慌ててクオレを呼びとめた。

「ク、クオレ、ちょっと待ってくれ！ 良い物がある！」

呼びとめられ、首を傾げるクオレを、ハイマンは半ば強引に自宅まで連れていくと、ゴミ山のなかから一冊の本を探しだしてクオレに手渡した。

「私の日記だ。これには私が異大陸で経験したことや学んだこと、調べたことや考察したことなどの全てが記してある。これを持っていってくれ、きっと役に立つはずだ」

「ありがとう、恩に着る」

日記をしかと受け取って、代わりに懐から取り出した皮の袋をハイマンに手渡した。そ

れには金貨がぎっしりと詰まっていた。この日記にどれほどの価値があるか、理解できぬクオレではない。

「ではな、ハイマン。行ってくる」

「気をつけてな。私たちは黄金を手に入れようとして失敗したが、君ならやれるだろう。無事を祈っている」

そしてクオレはハイマンと別れた。

……数日後、クオレ率いる黄金境探索隊が西のキール軍港より異大陸に向けて出発した。彼らの運命は、この時はまだ、神にしかわからない。

続きは本編にて。